

モンゴル時代の度量衡

——東トルキスタン出土文獻からの再検討——

松 井 太

はじめに

東トルキスタン出土の古ウイグル語世俗文書には種々の度量衡＝計量單位が現われる。これらの計量單位を實體的に把握することは、文書の歴史的背景とくに社會經濟状況を再構成する上で不可欠である。すでに山田信夫の先驅的業績により、いくつかのウイグル語の計量單位については、複数の單位の相互関係や漢語の計量單位との借用関係・對應関係が解明されている [山田 IV; Yamada XII]。ただし山田が分析に利用したのは、ウイグル文書の中でも契約文書類に偏っていた。またウイグル文書の多くは実際には 13～14 世紀のモンゴル時代に年代比定され¹⁾、ウイグル語の計量單位には同時代のモンゴル語文獻に在證 (attest) されるものもある。従って、ウイグル文書中の計量單位をより實體的に把握するためには、契約文書以外のウイグル文書をも利用し、またモンゴル語やさらには同時代のモンゴル支配下のユーラシア各地域の計量單位とも比較検討することが有効であろう。

そこで本稿では、モンゴル時代の東トルキスタン出土ウイグル語文獻にみえる液體計量單位 qap, tämbin, saba と穀物計量單位 tayar とを主な対象として、モンゴル語・ペルシア語・漢語の計量單位との對應関係や實態値を考察する。さらに、その成果をモンゴル支配下の度量衡體系に位置づけ、モンゴル時代ユーラシアの共時的構造をうかがう一端としたい。

1. qap, tämbin, saba

ウイグル文書に頻出する液體計量單位 qap, tämbin については、すでに 1 qap = 30 tämbin という對應関係が解明されている [山田 IV, 180-182; Yamada XII, 493-495]。本節では、この兩單位と漢語の容量單位との関係を考察する。

モンゴル時代に屬する 2 件のウイグル文行政命令文書 (供出命令文書) には、この tämbin に關連して saba (<mo. saba) 「皮袋」という語が現われる。まず U 5288 文書 = 松井 1998b, Text 4 では供出物件として bir saba araḡi 「1 saba の

蒸留酒」が頻出し、saba「皮袋」が液體計量單位として使用されたことを示す。一方 U 5510 文書＝松井 1998b, Text 15 では 3 tām̐bin の蒸留酒 (araqī) をその容器としての saba「皮袋」と共に供出することが命じられる。以上の用例から、液體計量單位としての saba と tām̐bin について、3 tām̐bin = 1 saba という對應關係が推定される [松井 1998b, 28-30, 52]。

この 2 つの液體計量單位 tām̐bin (>mo. tembin) と saba は、2 件のチャガタイ＝ウルス (Čaγatai-ulus) 發行モンゴル語驛傳利用特許狀 (BTT XVI, Nrn. 72, 74) においても、驛傳利用者に糧食として支給される飲料 (umdan)・ブドウ酒 (bor) の額を規定する際に用いられる。まず西暦 1353 年に發行された Nr. 72 文書 (line 7-9) では 1 日につき「5 tembin のブドウ酒・2 (本の) 脚 (köl) の肉・3 badman の穀物 (künesün)」を使臣たち (elčin (pl.) <elči) に支給することが命じられる。一方、西暦 1338 年に發行された Nr. 74 文書 (lines 10-11) ではブドウ酒係たち (borčīn (pl.) <borči) に支給される 1 日の糧食が「2 (本の) 脚 (köl) の肉・2 saba の飲料・2 badman の穀物」と規定される。3 tām̐bin (tembin) = 1 saba というさきの筆者の推定をこれらのモンゴル語文書に適用すると、Nr. 74 の「2 saba の飲料」は 6 tembin に相當し、Nr. 72 の「5 tembin のブドウ酒」と近似することが確認される。Nr. 72 の飲料 (ブドウ酒) の支給額は Nr. 74 より 1 tembin 少なくなるが、逆に穀物 (künesün) の支給額は Nr. 72 が Nr. 74 より 1 badman 多い。肉の支給額は兩者とも「2 (本の) 脚の肉」で一致するから、全體としてこの兩文書における糧食の支給額はほぼ同量といえる²⁾。

ここで、モンゴル帝國の驛傳制における糧食支給規定を、主に『經世大典』所收の『站赤』(廣文書局版) に依りつつ確認する。周知の如く、モンゴル帝國の驛傳制は第 2 代皇帝オゴデイ (Ögödei, r. 1229-41) 時代に中華地域から南ロシアに至るまでの帝國全土に擴大された。その際、驛傳を利用する使臣 1 名に支給される糧食の量は、一日につき肉 1 斤・麵粉 1 斤・米 1 升・酒 1 瓶と規定された (『站赤』1、10、太宗皇帝元年 (1229) 11 月是月；同、12-13、同 9 年 (1237) 8 月 23 日)。この糧食支給規定は第 5 代皇帝クビライ (Qubilai, r. 1260-1294) 以降もほぼ踏襲されたが、中統 4 年 (1263) 以降は酒の計量單位は瓶から升到變更されている³⁾。

このような漢文史料中の糧食支給規定と上引の BTT XVI, Nrn. 72, 74 文書の糧食支給額とを比較すると表 1 を得る。注目すべきは、Nr. 74 文書の糧食支給の内容が脚の肉 2 本・飲料 2 saba・穀物 2 badman とされる点である。この「肉：飲料：穀物 = 1：1：1」という支給比率は、漢文史料中の肉 1 斤・酒 1 升・麵 1 斤というオゴデ

	Nr. 72	Nr. 74	漢文
肉	2 köl	2 köl	1 斤
飲料	5 tembin	2 saba	1 升
穀物	3 badman	2 badman	1 斤
米			1 升

表 1

イ時代以来の糧食支給規定との連動を推測させる。1270～80年代にかけて元廷は東トルキスタン～舊ウイグル國領内の驛傳に對する影響力を強化しているので⁴⁾、オゴデイ期以来のモンゴル驛傳制の諸規定はこの間にウイグル領に浸透し、同地域がチャガタイ＝ウルス支配下に入った14世紀以降にも踏襲されたと考えられる⁵⁾。また Nrn. 72, 74 文書で穀物計量に用いられる重量單位 mo. badman (～uig. batman) は chin. 斤に相當することが、元發行の銅權に記されたウイグル字モンゴル語・アラビア字ペルシア語・パクパ字漢語・漢字漢文の四體合璧銘文から判明している [松井 2002, 111-112]。従って、Nr. 74 文書の飲料の計量單位 mo. saba も、漢文史料中の酒の計量單位 chin. 升到對應すると考えられる⁶⁾。なお、Nrn. 72, 74 兩文書中の糧食支給額は、「2 (本の) 脚の肉」(Nr. 72)・「2 (本の) 脚の肉・2 升 (saba) の飲料・2 斤 (badman) の穀物」(Nr. 74) という數値や、驛傳利用者が複數形 (elčin; borčin) で記されることから、利用者 2 名に對する總額とみてよからう。

さらに、3 tämbin=1 saba=1 升の對應關係を傍證するものとして、ウイグル文供出命令文書 U 5308 (TII D238a=USp 75) が挙げられる。この文書も草書體で書かれており、モンゴル時代に比定されることは確實である。以下に筆者の原文書調査に基づくテキスト・和譯を掲げる。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------|
| 1 it yıl bigrminč ay iki otuz-qa | 犬年第十十一月二十二日に。 |
| 2 yanga buqa yurčin ilči-kä altı | ヤンガ＝ブカとユルチン使臣への |
| 3 otuz-qa-tägi käzig aš-qa bir qap | 二十六日までの番役食糧として、
1 qap の |
| 4 bor-nı biküş buqa borluq-ı birzün | ブドウ酒を、ビキュシュ＝ブカの
ブドウ園が供出せよ。 |

この U 5308 文書は、ヤンガ＝ブカとユルチンという 2 名の公權力者 (使臣 ilči と稱するのでおそらく驛傳の利用者と思われる) の番役食糧 (käzig aš) [松井 1998a, 050; 松井 2002, 108] としてブドウ酒 1 qap を供出することを、ブドウ園の保有者であるビキュシュ＝ブカに命じるものである⁷⁾。供出物件のブドウ酒は 11 月 22 日～26 日までの 5 日分であるから、毎日の支給量は 1 qap (=30 tämbin) ÷ 5 = 6 tämbin、使臣 1 人あたりではその半分の 3 tämbin=1 saba=1 升となり、前掲 BTT XVI, Nr. 74 文書と同一の基準に基づくといえる。

以上、1 saba=3 tämbin=1 升という對應關係を指定することにより、東トルキスタン出土ウイグル語・モンゴル語文書と漢文史料にみえるモンゴル時代の驛傳利用制度・糧食支給制度は整合的に説明される。この 1 saba=3 tämbin=1 升という對應關係を、山田が解明した 1 qap=30 tämbin という對應關係に適用

すれば、1 qap=10 saba=10 升=1 斗という對應關係が導かれる。また元制の 1 升は約 840 ml に相當するので⁸⁾、1 qap=1 斗 \approx 84 l、1 tãmbin=1/30 qap \approx 2.8 l という實態値を提示できる。

2. taɣar

本節で扱う uig.-mo. taɣar は、元來テュルク語で「袋、穀物袋」を意味し [ED, 471; CTD I, 312; DTS, 529]、モンゴル語・ペルシア語にも借用された。13～14 世紀のモンゴル語文書では chin. 石 (\approx 84 l) に對應する穀物計量單位として用いられ [松井 1997, 28-29, 36-43; 後掲語註 4, šngsi]、ペルシア語史料でも原義の「袋」以外に「軍糧・糧食」さらには穀物計量單位として用いられる [TMEN II, 512-519, Nr. 905]。『世界征服者史』はフレグ (Hülegü) の西アジア遠征出發時 (1252) に「兵 1 名につき 1 tağār (<mo. taɣar) すなわち 100 mann」の穀物供出が命令されたといい [TĜ III, fol. 94; 本田 1961=本田 1991, 282]、この時期までに穀物計量單位としての taɣar の用法は確立していた。さらに遡ってオゴデイ丙申年 (1236) 以前の華北=舊金朝領での毎戸の地税は 2 石～4 石と定められた⁹⁾。遅くともこの税制整備の時點には mo. taɣar=chin. 石の對應關係が確立していたと推測される。

一方、東トルキスタン出土のウイグル文書においては šīr, kūrī, šīng, qav という穀物計量單位の體系が存在し、それぞれ石、斗、升、合という漢語の容量單位(穀物計量單位)に對應する [山田 IV, 171; Yamada XII, 491-493]。從來知られる限り、taɣar が確實に穀物計量單位として用いられるウイグル文書の例¹⁰⁾は SUK Lo18 のみである (line 4: manga qlimdu-qa buɣday kărgāk bolup irinčipl-tin iki yīrīm taɣar buɣday āldīm 「私カリムドゥに小麦が必要となり、イリンチバルから 2.5 taɣar の小麦を借り受けた」)。この Lo18 はモンゴル期に比定されるが [森安 1994, 74-75]、上引の文脈からは uig. taɣar=石の對應關係は明證できず、山田はこの taɣar を「タガル」と音譯し [山田 V, 21-24]、SUK 編者も原義通り「袋」と譯すにとどまっている。なお泰定 3 年 (1326) 立石の漢文・ウイグル文合璧『重修文珠寺碑』(line 22) には chin. 田地一十碩/uig. on taɣarlıq yir-ni suv-nī 「10 石の(種が播かれる)田地」とあり、uig. taɣar=chin. 碩(=石)の對譯例が在證される [耿世民・張寶璽 1986, 260-261, 263. ただし「碩」を「頃」と誤讀する]。しかし同碑は河西地方の肅州で撰述されたものであり、地域を若干異にする東トルキスタン～舊ウイグル領のウイグル語でも taɣar=石の對應關係が確立していたとは即斷できない。

四

ところが筆者は、この uig. taɣar=chin. 石の對應關係を考察する上で、近年公刊された東トルキスタン出土ウイグル文小麦貸借契約文書 SI Kr I 147 (=Tyr-yuшева 1996, Text 1) が重要な意義を有することを發見した。この SI Kr I 147 文

書は、書體その他の特徴 [cf. 森安 1994] に加え、ムスリム人名 (uig. Īr<a>sul < Ras-ūl; uig. Sulayman < Sulaymān) が現れることから、ほぼ確實にモンゴル期に比定できる。Tyrysheva の校訂テキストには誤讀が多いので、以下には筆者の原文書調査に基づく再校訂テキスト・和譯（凡例は松井 1998b を参照。和譯の丸數字は原文書の行数を示す）と最小限の語註を掲げる。

- 1 yılan yıl ikinçi ay on iki-
- 2 -kā manga ĩrsul-qa öđünü buɣday
- 3 krgäk bolup yabaɣu-tin öši-
- 4 -ning ũngsi birlä üç taɣar ik
- 5 iki küri buɣday aldım bu buɣday-
- 6 -nı bu oq yıl küz toqşunč ay bir
- 7 yangıda yabaɣu kälip körsär alıp
- 8 alur biz täğürüp birür biz birginčä
- 9 män ĩrsul yoq bar bolsar män bu buɣday-
- 10 -nı birlä alɣuči tung su tay paošin
- 11 män sulayman öz bodum-tin köni birür
- 12 män bu biđig-täki buɣday iki taɣar
- 13 ĩrsul bodı-ta sulayman bodı-ta bir
- 14 taɣar iki bu nišan ĩrsul
- 15 bu nišan män sulayman-niňg'ol
- 16 bu nišan män tanuq []
- 17 tanuq bu nišan män []
- 18 bäg tämür ĩrsul-qa ayıtıp bitidim

①蛇年第二月十二日②に。私に（即ち）イラスルに、借用の小麥が③必要となつて、ヤバグから、彼自身④の升マスで（計って）、3 taɣar⑤2 küri の小麥を借り受けた。この小麥⑥を、まさに今年の秋第九月初（旬の）⑦一日に、ヤバグが来て見たときに、私達は受け取って⑧受領する。私達は調達して返済する。返済する前に⑨私イラスルが逃亡すれば、この小麥⑩と一緒に借用した同取（人）で代保人の⑪私スライマンが、私自身から正しく返済⑫する。この證文中の小麥は、2 taɣar を⑬イラスル自身に、スライマン自身には 1⑭taɣar 2 (küri とする)。このニシャン印はイラスル（のものである）。⑮このニシャン印は、私スライマンのものである。⑯このニシャン印は、私、立會人……………⑰立會人、このニシャン印は、私……………⑱ベグ＝テミュルがイラ [スルに口述させて書いた]。

【語註】2, *ödünü*: Tyryшева は v. *ötün*-「請願する、奏上する」の副動詞形としつつ、カーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšgari) のテュルク語辭典にみえる *ötünč* 「貸借 (ссуда, заём; loan, debt)」[DTS, 393; CTD I, 154; ED, 61] に関連づけた。しかしウイグル語棉布消費貸借契約文書 TIII D279=Raschmann 1995, Nr. 75 (lines 1-3) にも、本處と同様の文脈で *manga ögärünä-kä ötünü böz krgäk bolup aqıl-ta tört ton-luq böz ötünü altım* 「私に (即ち) オゲリュネに借用の (*ötünü*) 棉布が必要となつて、アキルから 4 つの衣服用棉布を借り受けた (*ötünü altım*)」という文言がみえる。Raschmann [1995, 149] はこれらの *ötünü* をいずれも「謹んで、請願して (*ergebenst*)」と譯すが、筆者はあえて *ötnü* “A particle used in connection with loans; debt, loan” [CTD I, 153; ED, 60; DTS, 393] との関連を想定し、*ötünü* 「請願して」が名詞化して「貸借」を意味したものと推測する¹¹⁾。新ウイグル語の *ötünä~ötnä* 「貸借、借金」、*ötnä al-* 「借りる」、*ötnä bär-* 「貸す」も参照 [Wb I, 1266; Jarring, 220; WHCD, 754; Schwarz, 443]。

4, *šngsi*: ~*šngsi* < chin. 升子。本處では容器としての「升マス」。Tyryшева が文脈から「秤、マス (мера)」と譯したのは正しいが、*s(ä)ks(ä)ni* < *säksän* 「80、八十」という轉寫は誤り。『華夷譯語』(北京圖書館古籍珍本叢刊 6, 161) でも *mo. šngsi/chin. 升* の對譯例がみえる [cf. 松井 1997, 42-43]。さらに大英圖書館所藏ハラホト (Qara-qota) 出土蒙漢合璧文書 Or. 8212/764=KK. 0118. gg. (line 2) の *nayan* (....) *taɣar qoyar šim tabun šngsi* 「80 (+x) 石 2 斗 5 升」という在證例から、*mo. šngsi* は *taɣar*=石、*šim*=斗 [松井 1997, 36-43] に續く穀物計量單位「升」としても用いられたことが判明する。4, *ik*: *iki* と書くのを何らかの理由で中斷し、次行冒頭に書き直している。7, *yabaɣu*: Tyryшева は意味不明とするが、明らかに line 3 と同じく貸主の人名である。7, *kälip körsär*: Tyryшева は *q(i)lip kürig-läp* (?) 「脱穀し? 計量して (обмолотив (?) и отмерив)」とするが従えない。既知のウイグル文貸借契にはみられないが [cf. 護 1961, 236; 山田 IV, 110-120]、貸主ヤバグ (Yabaɣu) が返済を請求する文脈と考える。10, *tung su tay paošin*: Tyryшева の *tov* (?) *šu ti bošır* は完全な誤讀。*tung su~tungsu* < chin. 同取; *tay paošin~taypaošin* < chin. 代保人 [護 1961, 242-249]。11, *bodum*, 13, *bodī*: Tyryшева はこれらの *bod* (>*bodum*, *bodī*) を「氏族、家族」と譯すが、ここでは「自身」[ED, 296-297; DTS, 106-107] と譯しておく。Cf. SUK Em01: *mäning öz bodum-qa* 「私自身に」(lines 5) ~ *öz bodī* 「彼自身」(line 13)。14, *iki*: Tyryшева に従い、この後に *küri* を誤脱したものとみる。18: *bäg tämür* の後に屬格語尾 *-ning* を復元した Tyryшева には従えない。その他のウイグル契と比較し、缺落部には「イラスル (=借主) に口述させて書いた」という文脈を推補する。

さて、本文書 lines 4, 12, 14 には穀物計量單位としての *uig. taɣar* が在證され

る（これを Tyгушева は全て重量單位 tang と誤讀する）。そして üč taɣar iki küri 「3 taɣar 2 küri」という記載 (lines 4-5) は、uig. taɣar が küri = chin. 斗のすぐ上位の穀物計量單位すなわち chin. 石に對應することを示す。

ウイグル語世俗文書で「石」を示す穀物計量單位としては、taɣar よりも šīr の方が頻用される。この uig. šīr は西ウイグル期に chin. 石から借用され、その容量も唐代の石（≒60 l）を繼承していた〔森安 1991, 55, 57〕。一方、穀物計量單位としての uig. taɣar は、いずれもモンゴル期に比定される文書に在證されるので、モンゴル支配を通じてモンゴル語からウイグル語に還流したものであり、その容量もモンゴル期の石（≒84 l）に等しいと思われる。とすれば、モンゴル支配下の東トルキスタンのウイグル語では①既存の šīr が新來の taɣar に統一された、②容量の異なる舊・新2つの體系が併存した、の兩様の假説を提示できる。しかし SI Kr I 147 文書では、taɣar = 石に續く「斗」を示す際、mo. šim ではなく舊來の uig. küri が用いられる。よって筆者は上述の假説①を採り、mo. taɣar > šim > šingsi という體系のうち最上位の taɣar = 石のみが uig. šīr と相互置換できる形でウイグル語に導入され、制度上は uig. šīr が増量され taɣar に統一されたと考える。クビライ治世中期以降、元廷はウイグル領で檢地や地稅の徵收（および免除）を実施しており¹²⁾、その際に地稅納入の基礎となる計量單位として元制の taɣar が導入されたのであろう。ほぼ同時期にウイグル領の驛傳管理が強化され、それに伴って驛傳運營規定や液體計量單位が浸透したこと〔本稿第1節參照〕も想起すべきである。

さらに、ウイグル領と同じく 13 世紀以降にモンゴル支配下に組み込まれた江南 = 舊南宋領地域とイラン地域での状況についても検討する。

まず『元史』卷 93・食貨志 1・稅糧「至元十九年……其輸米、止用宋斗斛、蓋以宋一石當今七斗故也」によれば、舊南宋の容量單位は元制の 7 割に相當した。またこの記事は、至元 13 年 (1276) にモンゴルが南宋を接收した後も、江南での稅糧徵收に際しては引き續き宋制を使用することが至元 19 年 (1282) に公認されたという〔cf. Cleaves 1955, 32〕。しかし至元 23 年 (1286) 付の『元典章』卷 57・刑部・諸禁・雜禁・禁私斛斗秤尺の條には「以前、各路で商業を營む家が用いている物差し・マスなどの計量器具が法制によっていないため、關係官廳に文書を發行して、政府の現行の公定計量器具にてらして同様に製造させ、官員を派遣して原器の大きさが均等であるかを確認した上、包裝・捺印して値を確定し、各地に交付してあまねく使用させ、舊來使用していた各種の計量器具は期限を決めて沒收させることとした（先爲各路行鋪之家行用度尺・升斗等秤俱不如法、筭付合屬、照依係官見行用法物同様制造、差官較勘均平一體、封裏印烙、定立本價、發下隨路遍歷行使、立限拘收舊使斛盤升斗尺秤）」とあり、至元 23 年以前に宋制禁止・元制施行が江南地域に布告されたことが知られ、さらに後文では元制の再徹底が命じら

れている。この至元 23 年には、江南から華北へ海運される税糧の輸送額に元制と宋制との差による不足が生じていることが政治問題化しており¹³⁾、元制の再徹底はその対策に相違ない。とすれば、至元 23 年以前の江南への元制導入も、至元 19 年 (1282) の海運開始に伴い、南北の計量単位差を解消して海運を円滑に運営するために施行されたものと考えられる。この年に宋制が公認されたとする前掲『元史』食貨志の記事はおそらく明の史官による誤解であろう¹⁴⁾。ただし、同様の元制徹底・宋制禁止は皇慶元年 (1312) にも再度發令されており (『元典章』卷 57・諸禁・雜禁・斛斗秤尺牙人)、民間レベルでの元制徹底は結局は不十分であった。とはいえ孔齊『至正直記』によれば、元末の浙東地方や杭州・宜興州ではやはり「故宋の遺製」が通用していたものの、孔齊の「吾郷」つまり溧陽州では元制が浸透していたという¹⁵⁾。また 1324 (?) ~ 1328 年に中華地域に滞在したフランチェスコ修道會士オドリコ (Odorico da Pordenone) も、江南のある富民の穀物収入に言及する際に *tagar* (< *mo. tayar*) を計量単位としている [Yule 1916, 255, 329]。江南でモンゴル語 *tayar* が穀物計量単位として用いられる背景としては、元制の導入とその一定の浸透が想定できる。

一方イラン地域では、計量単位の地域的差異を解消するため、第 7 代フレグ＝ウルス當主ガザン (Gazan, r. 1295-1304) が度量衡統一策を実施し、タブリーズ現行の重量単位 *mann* を基準としてイラン各地の穀物計量単位 *kila* と *tagār* (< *mo. tayar*) や液體計量単位 *paymāna*, *hik* の量を確定した。この際、1 *tayar* は 10 *kila* = 100 *mann* と設定されている [本田 1972 = 本田 1991, 333-341]。これはフレグ西征時の 1 *tayar* = 100 *mann* という基準に等しい [本節冒頭参照]。タブリーズは第 2 代當主アバガ (Abaqa, r. 1265-81) 以来のフレグ＝ウルスの本據地であるから、當地ではモンゴルによって導入された 1 *tayar* = 100 *mann* の對應関係が確立していたと思われる。とすれば、*mann* を基準とするガザンの度量衡統一政策は、結果的に、モンゴル政權傳來の単位 *tayar* にイラン在來の単位を連關・統一させることとなったと思われる。

以上から、モンゴル支配下の江南・イランの雙方で、モンゴル政權公定の *tayar* を穀物計量単位として導入し、これに舊來の穀物計量単位を統一・連關させる政策が實施されたことが確認できる。このことは、モンゴル支配下の東トルキスタン～ウイグル領において舊來の *uig. šīr* が新來の *mo. tayar* に制度上統一されたとする筆者の推測を補強するものである。

3. モンゴル時代東西ユーラシアの度量衡

八

すでに諸先學により、モンゴル時代のウイグル語・モンゴル語・ペルシア語の貨幣単位 (= 銀の重量単位) は表 2 のような単一の體系に收斂されることが解明されている [前田 1944 = 前田 1973, 19-39; 森安 1997, 9-13]。さらに『ワッサーフ史』

銀 (g)	chin.	mo.	uig.	pers.
2000	錠	sūke	yastuq	bāliš
40	兩 = 貫	sijir	stīr ~ sītīr	sir
4	錢	bakir	baqīr	

表 2

容量 (l)	chin. (容量)	mo.		uig.		pers. (穀物)
		穀物	液體	穀物	液體	
84.0	石	taṣar		šīy/taṣar		tagār
8.4	斗	šim		kūri	qap	kīla
0.84	升	šingsi	saba	šing	saba	mann
0.28			tembin		tāmbin	
0.084	合			qav		

表 3

には元治下の交鈔制度について「彼らの術語 (iṣṭīlāḥ) で鈔 1 錠 (bāliš-i čāw) は 50 兩 (sir) であり、その価値は 10 dinār である。また金・銀 1 錠 (の重量) は 500 miṣqāl である」とあり [TW / A, fol. 22b; TW / B, fol. 22]、モンゴル時代のイランにおける重量単位 miṣqāl (~ arab. miṭqāl) [cf. Hinz 1955, 1-8] が 1 錠の 1 / 500 すなわち重量単位としての chin. 錢 = uig. baqīr = mo. bakir に相当したことが判明する¹⁶⁾。

一方、本稿の考察に基づき、東トルキスタン出土文献にみえるウイグル語・モンゴル語の穀物・液體計量単位と中華・イラン地域のそれとの對應關係を整理すると、表 3 を得る。この表 3 は、モンゴル時代のウイグル語・モンゴル語・ペルシア語・漢語の穀物・液體計量単位が、uig.-mo. taṣar = pers. tagār = chin. 石を基軸としてユーラシア東西をおおう単一體系に収斂されたことを示す。これは、上述した貨幣単位 (= 銀の重量単位) の動向と軌を一にするものである。

貨幣単位 (= 銀の重量単位) の単一體系化は、従来、モンゴル支配下のユーラシア廣域で經濟交流が活性化したことの反映と考えられてきた [e. g., 前田 1944 = 前田 1973, 32-33; 杉山 1995, 213-219]。また前節に挙げた漢文・ペルシア語編纂史料は、モンゴル諸政権が政策的に穀物計量単位の統一を圖ったことを物語る。さらに第 1 節でも言及した四體合璧銘文を持つ元の銅權 [黃時鑑 1998; 松井 2002, 111-112] も、元廷がモンゴル人・ウイグル人・イラン系ムスリム・漢族の全てを支配下住民として意識しつつ、彼らの間での重量単位の統一を意圖していたことを示す。一方、ガザンがヒジュラ暦 697 年 (1297/98) に元廷へ派遣した使節は通商・交易を重要な目的としていた [惠谷 1966]。ガザンの度量衡統一令は、この

遣使が元から歸途に就くのはほぼ同時期の1302年に發せられており〔本田1972＝本田1991, 338〕、元制と體系を統一することで交易の發展を企圖していた可能性がある。以上のような度量衡＝計量單位制度の制定に関わる諸状況と、物流の同滑化を意圖した商税制度・牙人抑制策〔宮澤1981〕や、中央アジア・西アジア圏との通商までも視野に入れた「中賣寶貨」制度〔四日市2002〕などの元政府の商業政策とを併せ考えれば、元をはじめとするモンゴル諸政權は、政權の枠組みを超えて東西ユーラシア廣域にわたる支配地域の物流・經濟交流を圓滑化・活性化するため、貨幣單位（＝銀の重量單位）だけでなく計量單位＝度量衡全般についても単一體系化を意圖的に促進したと結論できる。

もちろん、前節に挙げた漢文編纂史料は、民間レベルでの元制の度量衡の不徹底ぶりを示しており、また地域間決済手段に適した銀とは異なり穀物・液體計量單位の實態値までが各地で常時完全に一致したとは考えにくい¹⁷⁾。しかし、少なくともモンゴル公權力支配に係る局面では、ユーラシアの東方・西方を問わず、モンゴル政權の策定した度量衡＝計量單位が強制されたと思われる。特に東トルキスタン出土ウイグル語・モンゴル語文書類に限ってみれば、税役制度・交通制度など政治支配システムに関連する公文書中の計量單位については、モンゴル＝元制との一致を前提としてその實態値を社會經濟史的に位置づけることが可能であろう。

おわりに

本稿の考察結果は、まず第1に、東トルキスタン出土のウイグル語・モンゴル語文書から社會・經濟状況を再構成する作業の基礎となる。第2に、モンゴル時代ユーラシア經濟交流の活性化に関する先學の知見をさらに補強するものである。

ウイグル語・モンゴル語文書には、本稿で扱ったもの以外にも様々な單位呼稱がみえる。それらの實態値についても元制との関連から検討の必要がある。また、モンゴル支配下の經濟交流の活性化は、モンゴル支配の外縁にあった西歐・東南アジア・インド・エジプトにも大きな影響を與えたことが推測されている〔黒田1999, 277-279〕。これらの地域の計量單位に對モンゴル交易の影響がみえるか否かも、今後検証されるべきであろう。

註

一〇

- 1) ウイグル文書の時代判定の指標については森安〔1994, 63-83〕を参照。
- 2) Weiers〔1967, 40〕も5 tembin (Nr. 72) と2 saba (Nr. 74) とはほぼ同量と推測しているが、單に兩文書の肉・穀物の支給額の近似に依據したのみで論據を缺いていた。

- 3) 『站赤』1、16、中統2年(1261)5月19日；同、18、中統4年(1263)3月；同3、53-54、至元21年(1284)4月。なお酒の計量に用いられる「瓶」と升とはほぼ同量と考えられる。『站赤』2、42、至元16年(1279)6月「是月、大名路申：使臣盃酒、在前定到、萬戶日支酒三十升、千戶二十升、百戶十五升、使臣人員一升。爲不見軍宿頓、斟酌合支多少。都省令樞密院議定：萬戶日支酒三瓶、千戶二瓶、百戶・使臣例同日支一瓶。見出征軍人、下各路依上應付。仍定每瓶準酒一升爲數」。
- 4) 『站赤』2、45、至元18年(1281)4月29日「御史大夫玉速帖木兒(Yüś-Temür)・樞密副使朶兒朶海(Dordoqa)・僉樞密院事暗伯(Ambai)・中書省左丞耿仁等奏『諸王阿只(Ajiqu)言、舊站消乏、不能增新站物力。乞賜矜憫。依先例津濟、只令遞運租賦』。上曰『彼處站赤、乃茶合斛(Čayatai)兄所立。今朕增與物力、專令遞運租賦。除朕以急速事遣使外、不以是向昆弟使臣、此站勿得行』；『元史』卷63地理志6・西北地附錄「畏兀兒(Uyğur)地【至元二十年(1283)立畏兀兒四處站及交鈔庫】……別失八里(Biś-baliq)【至元十五年(1278)授八撒察里(Basa-Čarig)虎符、掌別失八里・畏兀(Uyğur)城子里軍站事。……十八年(1281)從諸王阿只吉(Ajiqu)請、自太和嶺至別失八里置新站三十】……彰八里(Čam-baliq)【至元十五年、授朶魯吉(Dorji)金符、掌彰八里軍站事】；『元史』世祖本紀・至元18年(1281)4月「自太和嶺至別八里(Biś-baliq)置新驛三十」；同・至元22年(1285)4月「置畏兀(Uyğur)驛六所」。
- 5) チャガタイ＝ウルス支配の成立がウイグル領での文書行政システムに大きな変化を与えなかったことは、ウイグル文供出命令文書の書式の共通性からもうかがえる[松井 2003, 57]。また、唐代からモンゴル時代を通じての諸制度の連続性については、松井[1998a, 043-074]も参照。
- 6) ちなみにBTT XVI, Nrn. 72, 74文書で肉の計量単位として用いられるköl「脚」も、その重量は斤に近似し、厳密ではないにせよ糧食支給の際には一定の基準となり得たと思われる。『飲膳正要』には肉の計量単位として「脚子」が頻見し、またウイグル文書でもuig. saq (< pers. sāq)「脚」が肉の計量に用いられる例がある[松井 2002, 108-109]。
- 7) 護[1960, 34]はBiküś-Buqaを人名とみなすことに反対するが、その必要はない。
- 8) 舊稿[松井 1997, 40]では小泉[1982, 143]の1升=948 mlという推定値を援用していたが、あらためて丘光明[1992, 263]の1升=835.7 ml、郭正忠[1993, 369]の1升=844~862 mlという試算を採用する。
- 9) 『元史』卷93・食貨志1・稅糧「初、太宗每戶科粟二石、後又以兵食不足、增爲四石」；彭大雅・徐霆『黑韃事略』「其賦斂、……米則不以耕稼廣狹、歲戶四石」。
- 10) Uig. tayarには穀物ではなく馬料としての麥ワラ(saman)の計量に用いられる例もある[e.g., 耿世民 1980；梅村 1981]。その實體量については別稿で検討する豫定である。
- 11) Clausonはötnüおよびötünčの語源を未在證のv. öten-とするが[ED, 60]、従えない。なおErdalはötünčをv. ötün-からの派生名詞とする[OTWF, 281 & n. 314]。
- 12) 『元史』世祖本紀・至元16年(1279)5月；『元典章』卷24・戸部10・租稅・僧道租稅體例。Cf. 松井 2002, 91-92。

- 13) 『大元海運記』(廣文書局版) 上、50、至元23年11月「平章薛徹干 (Sečegen) 等奏：海運糧四年。凡一百一萬石。至京師者八十四萬石。不至者一十七萬石。運者言、江南斗小、至此斗大、以此折耗者有之……」; 『元史』世祖本紀・至元23年11月「乙丑、中書省臣言：朱清等海道運糧、以四歲計之、總百一萬石、斗斛耗折願如數以償、風浪覆舟請免其征。從之」。
- 14) 元は穀物計量の際の不正を防止するため、宋の文思院の「小口斛」の形式を採用し、これに倣った計量用の斗斛を頒行した(『元史』世祖本紀・至元20年(1283)5月「戊寅……用御史中丞崔彥言、罷各路選取室女、頒行宋文思院小口斛」; 同卷173・崔彥傳「(彥)又言：宋文思院小口斛、出入官糧、無所容隱、所宜頒行。皆從之」; 『元典章』卷57・諸禁・雜禁・斛斗秤尺牙人「又准都省咨、發到鐵升斗小口方斛樣製、咨請收管」)。食貨志の「其輪米、止用宋斗斛」という記事は、この點を誤解したものである可能性も残る。
- 15) 『至正直記』卷3・半兩錢「浙東斗尺、皆仍故宋遺製、斗謂之百合足、比之今官數八升也【謂官數有二十合】。尺謂之百分、比今之官數八寸。吾鄉絕無此樣、皆用官樣。至宜興、則間有之。杭城人有七升斗・七寸尺、謂之小百合・小百分也」。
- 16) TW 諸寫本の参照には宇野伸浩氏のご協力を得た。特記して深謝する。なお『畏兀兒館譯語』の *uig. bir misqa* (< *mişqāl*) > 必兒米思哈 / *chin. 一錢* という對譯例 [庄垣内 1984, 157, No. 825] も、*mişqāl*=錢の對應を傍證する。
- 17) 岩武昭男氏からは、イラン地域におけるガザンの度量衡統一策も民間レベルでは十分に浸透しなかったという口頭のご教示を2000年6月に頂戴した。特記して深謝するとともに、同年10月に急逝された岩武氏のご冥福をお祈り申し上げる。

略號・文獻目録 (ABC 順)

- BTT XVI: D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung* (Berliner Turfantexte XVI). Berlin, 1993.
- 丘光明 1992: 『中國歷代度量衡考』科學出版社。
- Cleaves F. W. 1955: An Early Mongolian Loan Contract from Qara Qoto. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 18, 1-49, +4 pls.
- CTD: Maḥmūd al-Kāšyari, *Compendium of the Turkic Dialects (Diwān Luḡāt at-Turk)*, I-III. Tr. & ed. by R. Dankoff & J. Kelly. Harvard Univ., 1982-85.
- DTS: B. M. Наделяев et al. (eds.), *Древнетюркский Словарь*. Leningrad, 1969.
- ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkic*. Oxford, 1972.
- 恵谷俊之 1966: 「ガザン・ハンの對元朝使節派遣について」『オリエント』8-3/4, 49-55.
- Hinz, W. 1955: *Islamische Masse und Gewichte*. Leiden.
- 本田實信 1961: 「ガザン・カンの税制改革」『北海道大學文學部紀要』10.
- 1972: 「ガザン・ハンの度量衡統一」『山本博士還曆記念東洋史論叢』山川出版社。
- 1991: 『モンゴル時代史研究』東京大學出版會。
- 黃時鑑 1998: 「元代四體銘文銅權の考釋」『東西交流史論稿』上海古籍出版社、200-211。(初: 『伊朗學在中國論文集』2、北京大學出版社、1997)
- Jarring, G.: *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*. Lund, 1964.
- 耿世民 1980: 「幾件回鶻文文書譯釋」『文物』1980-5, 83-84.

- 耿世民・張寶璽 1986: 「元回鶻文『重修文殊寺碑』初釋」『考古學報』1986-2, 253-263。
- 小泉袈裟勝 1982: 『單位の起源事典』東京書籍。
- 郭正忠 1993: 『三至十四世紀中國的權衡度量』社會科學出版社。
- 黒田明伸 1999: 「貨幣が語る諸システムの興亡」『商人と市場』(岩波講座世界歴史15) 岩波書店、263-285。
- 前田直典 1944: 「元代の貨幣單位」『社會經濟史學』14-4。
- 1973: 『元朝史の研究』東京大學出版會。
- 松井太 1997: 「カラホト出土蒙漢合璧稅糧納入簿斷簡」『待兼山論叢』史學篇 31, 24-49。
- 1998a: 「モンゴル時代ウイグルスタン稅役制度とその淵原」『東洋學報』79-4, 026-055。
- 1998b: 「ウイグル文クトルグ印文書」『內陸アジア言語の研究』13, 1-62, +15 pls.
- 2002: 「モンゴル時代ウイグルスタンの稅役制度と徵稅システム」『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝國・元朝の政治・經濟システムの基礎的研究』科學研究費補助金研究 (No. 12410096) 報告書、87-127。
- 2003: 「ヤリン文書」『人文社會論叢』人文科學篇 10, 51-72。
- 宮澤知之 1981: 「元代の商業政策」『史林』64-2, 37-65。
- 護雅夫 1960: 「ウイグル文葡萄園賣渡文書」『東洋學報』42-4, 22-50。
- 1961: 「ウイグル文消費貸借文書」『西域文化研究』4、法藏館、223-254。
- 森安孝夫 1991: 『ウイグル=マニ教史の研究』(『大阪大學文學部紀要』31/32)。
- 1994: 「ウイグル文書節記(その四)」『內陸アジア言語の研究』9, 63-94。
- 1997: 「オルトク(幹脫)とウイグル商人」『近世・近代中國および周邊地域における諸民族の移動と地域開發』科學研究費補助金研究 (No. 07451082) 報告書、1-48。
- OTWF: M. Erdal, *Old Turkic Word Formation*, I-II. Wiesbaden, 1991.
- Raschmann, S. -Ch. 1995: *Baumwolle im türkischen Zentralasien*, Wiesbaden.
- Schwarz, H.: *An Uyghur-English Dictionary*. Bellingham (WA), 1992.
- 庄垣内正弘 1984: 「『畏兀兒館譯語』の研究」『內陸アジア言語の研究』1 (1983), 50-172。
- 杉山正明 1995: 『クビライの挑戦』朝日新聞社。
- SUK: 山田信夫(著) 小田壽典・P. Zieme・梅村坦・森安孝夫(編) 『ウイグル文契約文書集成 (*Sammlung uigurischer Kontrakte*)』1-3. 大阪大學出版會, 1993。
- TĠ: 'Alā al-Dīn 'Aṭā Malik Ġuwaynī, *Tārīḥ-i ġahānguṣā*, 3 vols. Ed. by Mirzā Muḥammad Qazwīnī, Leiden/London, 1912-37.
- TMEN: G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, I-IV. Wiesbaden, 1963-75.
- Тугушева, Л. Ю. 1996: Несколько уйгурских документов из рукописного собрания Санкт-Петербургского филиала ИВ РАН. *Петербургское Востоковедение* 8, 215-238.
- TW: Šihāb al-Dīn 'Abd Allāh Šaraf Širāzī (Waṣṣāf al-Ḥaḍrat), *Tajziyat al-Amṣār wa Tajziyat al-A'ṣār*, Ms. Istanbul, Sulaymanīe Masjīd Kütüphanesi, Ayasofia 3019 [TW / A]; Text, Tehran, 1338. [TW / B]
- 梅村坦 1981: 「吐魯番縣展覽館展示回鶻文公文書」『中嶋敏先生古稀記念論集』下、汲古書院、45-66。

- USp: W. W. Radloff, *Uigurische Sprachdenkmäler*. Ed. by S. E. Malov. Leningrad, 1928.
- Wb: W. W. Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, I-IV. St.-Petersburg, 1893-1911.
- Weiers, M. 1967: Mongolische Reisebegleitschreiben aus Čaratai. *Zentralasiatische Studien* 1, 7-54.
- WHCD: 『維漢詞典』新疆人民出版社、1982。
- 山田信夫 IV: 「ウイグル文貸借契約書の書式」『大阪大學文學部紀要』11, 1965, 87-216, + pls. 1-6.
- V: 「イスタンブル大學圖書館所藏東トルキスタン出土文書類」『西南アジア研究』20, 1968, 11-29, + pls. 31-32.
- Yamada, N. XII: Four Notes on Several Names for Weights and Measures in Uighur Documents. In: L. Ligeti (ed.), *Studia Turcica*, Budapest, 1971, 491-498.
- 四日市康博 2002: 「元朝の中賣寶貨」『内陸アジア史研究』17, 41-59.
- Yule, H. 1916: *Cathay and the Way Thither*, Vol. II. New ed. by H. Cordier. London.

付記 本稿は平成 15 年度科學研究費 (若手研究 (B)・基盤研究 (B) (1)) による研究成果の一部である。